寺報は無料、不要の方は一報下さい。

第209号

龍源寺報

秋彼岸号

臨済宗・妙心寺派
住職　松原信樹
佛母寺住職　松原覚樹
正福寺住職　松原行樹
TEL　3451－1853
FAX　3451－6094

振込 00160-0-104918　東京都港区三田5丁目9－23（郵便番号 108－0073）
Email: info@ryugenji.com　URL: http://www.ryugenji.com

秋彼岸におもう

松原　信樹

ベートーベンは、晩年に、耳が聞こえなくなるということと闘いながらも、音楽家として自らの天職の完成に向けて、精進の生涯を貫いた。松原泰道は、質素で規則正しい生活を常とし、多くの困難を乗り越えながら、宗教者としての一生を見事に生ききり、多くの著作を後世に残し、天寿を全うして一〇二歳の人生を閉じた。

およそ、あらゆる芸術家、学者、政治家、実業家などの、社会に貢献した人々はみな、その生涯において、それぞれ個性ある一生を築いて、この世を去った。もちろん、そうした際だった、選り抜きの人々以外でも、あらゆる人間がみな、その人なりに、自分の人生と運命を生き抜き、そのかけがえのない人生の軌跡を描いて、人生を全うしようと、一生を走りきっている。

おそらく、この世の人生においては、不運や事故、挫折や失敗が付きものであり、中には志半ばで、不幸のうちに倒れ、悲運の中で一生を終える人も存在するであろう。けれども、人間はすべて、最後には、自分らしい生き方を、運命として肯定しながら、この世に別れを告げる覚悟で人生を駆け抜けるものだと思う。そこに、かけがえのない自分自身の人生が、一回限りの形で生起し、それなりの個性と必然性を持ったものとして刻まれる。

禅宗では、本当の自分という意味の仏性（＝仏さまのこころ）が、私たち誰もに、もともと宿されていると説く。しかし、私たちは、毎日が忙しいから、そのようなことに、なかなか気づかない。私は、思う。私たちに、もともと宿されている、本当の自分という意味の仏性は、きっと、忍耐と精進に基礎をもつものではないかと。

私たちは、普段、生活をしていると、思いもよらず、その時、その場に応じて、姿を変えて映る水面の月のように、常に何かに翻弄され、忍耐や精進を強いられる。しかし、水面の月を映し出す天上の月の心に、もし、私たちが、立ち返るならば、日々の精進や忍耐という苦労も、秋の月のように風流と受けとれよう。

私は、二十年前、学校を卒業し、僧侶になるため、埼玉県新座市野火止の平林寺専門道場に入門した時、糸原圓應老師からいただいた色紙の「忍」の一字を今でも大切にしている。そして、松原泰道の「生涯修行・臨終定年」の言葉を座右の銘とし、今後も、私の人生を生ききりたい。

寄付

金十万円也　吉田洋子殿

金五万円也　小池興祐殿

金一万円也　匿名殿

日月庵寄付

金三十万円也　武内隆幸殿

ありがとうございました

＊経蔵建立のこと

泰道和尚から三代続く境内整備の事業を引き続き私の代でも継承し、将来は、境内の一角に『大般若経』を納める経蔵を建立したいと思っております。『大般若経』を納める所以は、泰道師・哲明師が、『般若心経』を説き続けてきたことによります。『大般若経』の写経も順調に進んでおります。ご寄進はその基金にさせていただきます。

秋ひがん法要

左の通り行ないます。ご家族そろってお参りください。

一、九月二十三日・秋分の日（午前十一時より）

一、法　話

一、斎　座（おとき）

※駐車場はありません。南北線をご利用ください。

龍源寺への交通の便（地下鉄）

- 都営三田線（目黒または三田、南北線は白金高輪駅下車。徒歩五分）
- 2番出口から地上に出ると案内看板に「龍源寺」名あり

龍源寺への交通の便（都バス）

- 田87　渋谷駅 ― 田町駅　魚ラン坂下下車
- 都06　渋谷駅 ― 新橋駅　古川橋下車
- 品97　品川駅 ― 新宿駅西口　魚ラン坂下・古川橋下車
- 反96　五反田駅 ― 品川駅 ― 六本木ヒルズ（循環）　魚ラン坂下・古川橋下車
- 東98　東京駅丸の内南口 ― 目黒駅　魚ラン坂下下車

龍源寺の歴史について（三）

松原　泰道

龍源寺は、以前に龍翔院と称えたのを、当寺五世の住持、正天禅師に参禅した奥平昌成公の法名に因み、今から二百二十七年前に、「龍源寺」と改めたことは先号に述べましたが、正天禅師は宮中から紫衣をたまわった名僧でありました。

この名僧に禅を問うた昌成公は、昌章公の末子で元禄七年十一月に江戸で生れましたが二才にして父を亡くされたので、宇都宮九万石の家督をつぎ、四才の時に又も国替えで宮津九万石に転じ、更に二十四才には豊前中津十万石に封じられました。

昌成公は、このように幼くて父を亡くしただけでなく、三人の姉と一人の兄とも早く死別されたことが記録に記されてあります。情にもろい江戸っ子の公の心を、どのように大きくゆさぶったかが想像されます。父や兄や姉を恋うて墓参されるうちに、いつとはなしに名僧正天禅師の室に入って参禅されるようになったのでありましょう。

この事は、禅師にさしあげた公の書簡を見ると、いかに求道の熱意に燃えたかが、よくうかがわれます。公はまた詩をよくし、晩年には「徳翁」と号しました。ある年の名月の夜に、美しく輝く月光を浴びて『江湖風月集』という書物をひもときながら

江湖秋月たちまち円成す。
風水鉄船波浪平らかなり。
密々たる通風、脚下を看よ。
悠然たる眼底に宇宙明らかなり

と、禅境を吐露しておられます。

等寺には、昌成公の画像（軸物）一幅が伝わっています賛は公の作ですが近臣の筆で

逼塞す乾坤向上の気。
吹毛劔また全威を露わす。
百則の公案那処にかある。
珊瑚坂上月依々たり

と記されてあります。

龍源寺の護持に力をつくした公は五十二才で死去されました。

その後も、奥平家の龍源寺護持の念あつく中屋敷の建具を寄進されたり、文久年間には上屋敷の東御殿を寄進されました。然し、各建造物は今は残っていません。僅かにオランダ屋敷といわれた中屋敷の建具数枚を見うけるに過ぎません。

この仏縁により、大正年間までは奥平家から香花料が届き、使者も参拝されましたが、その後は音信も絶えております。然し、たいせつな龍源寺開基さまでありますので、毎年十二月一日の開山忌恆例法要に、昌成公の画像とお位牌に、ご供養申し上げております。

花柳　紅緑

秋彼岸會を迎えます。▼九月八日から二十二日まで、京都の妙心寺に修習生として、詰めることになりました。お彼岸の支度を寺族に任せてのこととなります。▼泰道和尚の母・よねの七十年忌を秋彼岸法要で行いたいと思います。松原よねは、昭和二十年三重県の津の空襲で亡くなりました。丁度、泰道和尚と同じ七月二十九日が命日です。龍源寺の本尊さんをお守りしてきた方です。不思議な縁を感じます。▼龍源寺の裏地が開発となりました。今、古い家の解体工事が始まりつつあります。大きなマンションが建つそうです。幼少時代に近所の友人と遊んだ路地も無くなり、お寺を取り巻く環境も少しずつ変わります。これから少子化が進むのに、こんなに、たくさんマンションを建ててどうするのだろうと思いながら、マンションが建つ現実を受け止めています。龍源寺の境内は、緑を保っていきたいと思っています。▼十月に辰巳出版から出版される書籍を監修致しました。お正月号で、詳細をご報告致します。母は、実母とともに平穏に暮らしております。少し膝の痛みなどを抱えており、通院する日が多くなりましたが、気持ちはいつも元気でいてくれています。妻、亜矢は、会社の仕事と龍源寺の仕事を両立して、がんばっております。みんなで同居しておりますが、嫁と姑の対立は全くなく、私もそこに挟まれることもなく、全員が仕事を持ち、助け合いながら生活を送っております。何も無いことが一番いいことなのかもしれません。二番目の仏母寺住職は、八月のお盆。十月の仏母寺・先住職安井玉峰尼の三回忌の法要のため、多忙の日々を送っているようです。三番目の正福寺住職は、北鎌倉の円覚寺の日曜説法などを行い活躍中です。二人とも二児のパパになりました。▼八月は、北軽井沢の日月庵での研修を致しました。軽井沢での自然の中での坐禅は格別です。禅の会有志にもお手伝いいただきました。道場をみんなで護持して、大切に使っています。▼本誌では、泰道和尚が書いた「龍源寺の歴史について」を掲載しております。全て、年代が五十年前に遡ります。▼お檀家様で、お葬式をだされる場合、僧侶がいないとお葬式ができないゆえに、まず、一番はじめに龍源寺にお電話を入れていただきたいと思います。葬儀社も信頼のある葬儀社を紹介させていただきます。丁寧な仕事で皆様に喜ばれています。渋谷区広尾にある東北寺内龍源寺墓地・合同船は、墓地の継承者を気にしなくてもよい永代供養塔です。龍源寺の規則を守っていただければ、どなたでもこのお墓を使用できます。最近、墓地の改葬が増えているようです。又、若干ですが、墓地もございます。▼九月二十三日（水）、午前十一時より、秋彼岸会の法要を厳修致します。どうぞ、皆様、ご家族でお参りください。▼九月二十二日・十三時より、ちらし寿司のお野菜の刻みを行います。お手伝いいただける方、宜しくお願い申し上げます。

（信樹）